

銅像を歩く。

小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く（つづき）

Walking the Bronze Statues

A Walking “For the Good of sculpture in Japan” in *Matters of Sculpture*

by ODAWARA Nodoka (to be continued)

永田 郁

Kaoru NAGATA

崇城大学芸術学部美術学科教授

* Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：彫刻、銅像、御堂筋彫刻ストリート、ワンピース熊本復興プロジェクト

Keyword: sculpture, bronze statues, Midosuji-Sculpture-street, *One Piece* Kumamoto Revival Project

Abstract

This short essay is a document with photo-snaps when my walking through the bronze statues of Midosuji-sculpture-street and *One Piece* Kumamoto revival project. Continuing on from the previous issue, I would like to consider the sculptures in Japan, using Nodoka Odawara's paper of “for the good of sculpture in Japan” in *Matters of Sculpture* as a clue.

はじめに。

前号 12 号において筆者は小田原のどか氏による論考「この国の彫刻のために」

『彫刻の問題』（白川昌生・金井直・小田原のどか著、2017 年、トポフィル）に登場する長崎の平和公園のモニュメントを實際歩き、そこで自分が何を感じ、体験したかについて、小論を認めた¹。筆者はこの『彫刻の問題』を読む以前より、いつからか「銅像」が気になりだしており、この本が好機となり、実際にこの本を読み終わった後、前号 12 号を脱稿後も「銅像」巡りのフィールドワークを続けている。

以上の経緯より、本稿のタイトルを「銅像を歩く。」とし、副題に「小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く（つづき）」と添えた。

したがって今回も、小田原氏の論考を手掛かりにしながら、それが動機と言ってもいいが、自分の「銅像」巡りのフィールドワークを通して、「この国の彫刻」について思いを巡らし、歩き、考えた内容をまとめてみたい。

1. 「彫像建立癖 statuemia」の渦中？

小田原のどか氏はその論考の中で、長崎の《平和祈念像》を含めた平和公園のモニュメントに続き、「平和という名の彫刻は、長崎以外にも日本中の公共空間に存在している」とし、それらのほとんどが裸体の女性像であると指摘する（小田原 2017：39 頁）。その平和という名の裸婦像の普及は、東京・三宅坂交差点の《平和の群像》（図 1）を起点とし、それ以後、日本の銅像が男性の軍人像から女性の裸体像

／平和の彫刻への切り替えは円滑に行われたようにみえ、平和の裸婦像は瞬く間に日本中に普及した（小田原 2017：39-40 頁）。

こうした彫像の乱立の現象にかつて名を与えたのがフランスの近代史家モーリス・アギュロンであった。アギュロンは 18 世紀にフランスで起こった都市における彫像の氾濫を「statuemia 彫像建立癖」と名付けた（小田原 2017：41 頁）。これに対し、美術評論家ロザリンド・E・クラウスは氏の論考「展開された場における彫刻」において、オーギュスト・ロダンの《地獄の門》《バルザック像》の失敗と、《考える人》の誕生および台座の喪失から、彫刻のモダニズムが起こったと唱えた（R・クラウス 2007：70-71 頁）。これについて小田原氏はこの現象は、モニュメントという文脈との別離から、「彫像建立癖」の終焉とともに起きた出来事のように思えると述べている（小田原 2017：41 頁）。

そして、氏は日本の状況も、公共空間の彫刻も台座を失う道程だとする（小田原 2017：41-42 頁）。実際筆者がフィールドワークした大阪商工会議所の 3 会頭の銅像（初代・五代友厚、第 7 代・土居通夫、第 10 代・稲畑勝太郎）（図 2）や鹿児島県の朝倉文夫作の「島津斉彬公之像」（図 3）は記念碑的な役割を持ち、堅牢な立派な石組みの台座が彫像を支えており、その台座には彫像の名称とともに碑文を有するのが通例となっている。まさに碑文を記された台座がその像を担保するものとなっており、台座が本体とも言えるのである（図 2、図 3）。

前述の《平和の群像》以後、小田原氏は

戦後の野外彫刻はあるときから平和や何かを顕彰・記念するための「碑」としてではなく、「街の美化」や「地域活性」の目的で建てられるようになり、記念碑にとって最も重要な碑文（像がその場にある理由）と、碑文が記された台座を失ったと指摘し、さらに今日においては「彫像建立癖」の終焉かといえ、漫画やアニメのキャラクターの銅像の建立が相次いでいる状況は「彫像建立癖」の渦中であるとしている（小田原2017：42-43頁）。

実際に筆者が実見した熊本市内の白川に架かる長六橋に設置された四体の裸婦像にも、『遙』、『みなも』、『香魂』、『芽生え』といった抽象的なタイトルと作者の記したキャプションのみがみられるだけで、碑文を記した立派な台座は見当たらず（図4）、橋とともに熊本の日常の風景の中に佇んでいる。

以下、筆者が実際フィールドワークを行った大阪の「御堂筋彫刻ストリート」と熊本の「ワンピース熊本復興プロジェクト」の銅像を事例に挙げ、日本の野外彫刻が裸婦像、さらには漫画やアニメのキャラクターにその内容がシフトし、現在も「彫像建立癖」の渦中にある事実を確認し、その現象について私見を述べてみたい。

2. 御堂筋彫刻ストリートを歩く。

2018年3月28日（水）～29日（木）の二日に亘って、大阪の中心部を南北に走る御堂筋（地下鉄淀屋橋駅～心斎橋駅）の東西の両側の歩道に設置された「御堂筋彫刻ストリート」の計29の彫刻（東側15体、西側14体）を歩き（御堂筋彫刻ストリー

トマップ参照）、全作品を撮影した（【御堂筋彫刻ストリート作品集W01-14】、【御堂筋彫刻ストリート作品集E01-15】²を参照）。

この大阪のメインストリートである御堂筋淀屋橋から心斎橋の両側（東西）の歩道に設置された彫刻は1992（平成4）年以降大阪市の主導で設置されたものである。大阪市の発行する御堂筋彫刻ストリートリーフレットによると、「大阪市では大阪のメインストリートである御堂筋を市民や国内外からの来訪者に親しまれるアメニティ豊かな芸術文化軸としていくため、沿道企業等からの寄付により、世界にも一級品である彫刻を設置していく「御堂筋彫刻ストリート」の整備を進めています。」とある。

1992年、大阪市の「御堂筋都市彫刻設置検討委員会」を設置し、彫刻作品は、大阪市の市民生活都市像を象徴的に表すものとして、「人間賛歌」を主テーマとし、「人体」をモチーフとする。作品収集の方法は原則として、大阪市の御堂筋の沿道の企業より寄贈を受けるもの（寄贈した企業については図版を参照のこと）であった。

形状は高さが台座の高さを含め全体で約2m（彫刻全体の高さはおよそ1m以上）、幅は台座の約60cm～80cm程度であり、そのグレードは、抽象・具象、国内・国外を問わず芸術性の高いもの、その作品選定は市が設置する「御堂筋都市彫刻設置検討委員会」の承認を必要とし、その設置は大阪市の行う。

彫刻の設置計画概要については事業区域は御堂筋の土佐堀通りから長堀通りまでの区間延長約2km。その設置場所としては

原則として1街区に1点、土佐堀通りから中央大通りまでの区間では両側歩道の車道よりに設置し、中央大通りから長堀通りまでの区間では企業の敷地内の歩道際に設置するとある。(以上は <https://www.midosuji.biz/intro/sculpt.html> を参照。)

そうした事業計画のもと、オーギュスト・ロダン作《イヴ》(大阪瓦斯株式会社の平成4(1992)年8月)が第1作目で、平成21(2009)年5月の寄贈のオシップ・ザツキン作《女のトルソ》が29点目で最後であった。作家に関しても、ロダン、ブルーデル、クロチェッティ、J・デ・キリコ、H・ムーア、日本の作家では高村光太郎、佐藤忠良、舟越保武、富永直樹、中村晋也と近代から現代までの彫刻の巨匠たちが名を連ねている。これら彫刻の一大コレクションが、大阪のメインストリートである御堂筋沿い、東西の歩道に29作品が設置されているのである。

これだけの作品が本来あるべき美術館での展示であれば、肯けるのであるが、実際歩いてみて、感じたことは、中央大通りから長堀通りの作品は沿道の寄贈した企業の敷地内の歩道際に設置されているので、まだ鑑賞にたえる設置になっているが、その北側の淀屋橋方面の作品は歩道の車道側に設置されているため、沿道の企業や店舗に出入りする運送会社の車や自転車、通りを行き交う大量の人々や車といった日常の風景に埋もれてしまっている。

これに似た感覚をつい先日、熊本市内を流れる白川に架かる長六橋でも、散歩をしながら感じた。橋の中央部分の両側に4体の裸婦像が佇んでおり、ここも白川を渡っ

て、街に向ったり、郊外に向かう大量の車や人々が行き交う場所であり、彫刻が設置されているものの、日常の風景に埋没してしまっている。

また、これら御堂筋に設置された彫刻作品の主題を見たところ、29作品のうち、26体が女性像で、そのうち16体が裸婦像である。すなわち、女性像の6割以上が裸婦像であり、公共の野外彫刻における裸体率の高さを伺うことができる。小田原氏も図1の《平和の偶像》以来、平和の裸婦像が瞬く間に日本に普及していると述べているが、御堂筋の作品群もその一例と言えるであろう。「平和」という言葉は背負わないが。

ここで少し野外彫刻における裸婦像について考えてみると、「裸婦像 nude」について、『ザ・ヌード』を著したK・クラークや『イメージ視覚とメディア』を著したJ・バージャーは、ヌードは「見られること」あるいは展示され、オブジェとして見られることを前提としたものだと言っている³。すなわち、多くの美術館にある裸婦像は「見ること」を前提とする美術館という文脈で成立している。

それでは、御堂筋の沿道に設置された裸婦たちはどうだろう？果たして、見られているのだろうか？御堂筋の裸婦像も熊本の長六橋の裸婦像も巻末の写真でも明らかなように、野外に放たれた裸婦像は、車や人々が行き交う喧騒の中に佇み、もはや「見ること」が前提とならない、その風景の一部と化し、美術館で裸婦像を見るようには見られないのである。

つまり、「見ること」を前提とした裸婦

像が「そう」でなくなるのである。さらに言えば、近代以来、銅像彫刻が背負ってきた「モニュメンタル性」からも解放されたと言えるのではないだろうか。またかつて、ロザリンド・クラウスがロダンの《地獄門》《バルザック像》の失敗と、《考える人》の誕生および台座の喪失から、彫刻のモダニズムの幕が上がったと唱えたが⁴、これらの裸婦像たちも、台座の上には立つものの、台座はその像とそこが立っている場所を紐付ける力は有していないのである。

裸婦像は美術館という舞台から、公共の場に舞台を変えることで、見ることを前提としない、「風景」に変換したと言えないだろうか？ そういった意味では「モダニズム」な現象と言える。

3. ワンピース熊本復興プロジェクトをめぐる。

以上、大阪の御堂筋彫刻ストリートの裸婦像や熊本の長六橋に佇む裸婦像を歩いて、野外彫刻における裸婦像についての私見を展開した。

次に日本における「彫像建立癖」という現象の中で、近年顕著になっていくアニメや漫画のキャラクターの銅像の場合を少し考えたいと思う。

そこで本小稿では熊本地震の復興プロジェクトである「ワンピース熊本復興プロジェクト」による銅像設置を取り上げる。

2016年より展開している「ワンピース復興プロジェクト」のうち、2018年11月末に麦わら一味の船長ルフィ像（熊本県庁）が完成した。その後、現在までサンジ

像（益城町）、ウソップ像（阿蘇駅）の3体の銅像が完成し（資料編②、③）、今後2019、2020年度にかけて残り6体が完成する予定である。

現在完成したワンピース銅像3体について、実際現場へ赴き、各像を撮影してきた（各像については巻末の【資料編：ONE PIECE 熊本復興プロジェクト～麦わらの一味「ヒノ国」復興編】を参照）。それらの銅像を紹介しながら、その銅像がある風景について前述の御堂筋彫刻ストリートの彫刻作品と比較しながら私見を述べてみたい。

まずはこのワンピース熊本復興プロジェクト～麦わら一味「ヒノ国」復興編について説明したい。このプロジェクトは熊本地震（2016年4月）直後にワンピース作者の漫画家・尾田栄一郎氏が熊本に届けたメッセージから始まっている（資料編①）。そして、第一弾として2016年に熊本県内でスタンプラリーやラッピング列車のプロジェクトが実施され、翌2017年の第二弾ではワンピース連載20周年に合わせ、尾田氏と集英社から熊本県内の新成人に特別メッセージと記念品贈呈。2018年4月には尾田氏が「県民栄誉賞」を授与され、その受賞を記念して2018年11月30日にルフィ像が完成した。それ以後、熊本県下（県庁プロムナード（2018年）、阿蘇駅、益城町、御船町、熊本市動植物園（2019年度）、大津町、西原村、南阿蘇村、高森町（2020年度））に麦わら一味の銅像が設置されていくというプロジェクトである（ワンピース熊本復興プロジェクトHP〔<https://op-kumamoto.com>〕参照）。

この麦わら一味の銅像設置には、ストーリーがあり、それに基づき順次像が設置されていく。その物語はこうだ。

「熊本こと「ヒノ国」に上陸した麦わら一味は、熊本地震の被害が広範囲に及び、今なお住民が苦しんでいることを知ります。そこで船長ルフィが、一味の仲間たちに被災地の復興の手助けを指示！仲間たちはそれぞれの特技で被災地の困り事を解決し、復興へのエールを送るルフィのもと（県庁）で再会を誓います。」（ワンピース熊本復興プロジェクトHP〔<https://op-kumamoto.com>〕より引用）

それゆえ、船長のルフィは熊本県庁プロムナードに立ち、指示をしているのである。ルフィ像は右手の拳を天高くつき上げ、左掌もぎゅっと腰で握り、大地を踏みしめている（資料編④）。ルフィ像の台座にはワンピースのロゴと「MONKEY・D・LUFFY」の文字が見え、台座背面には作者の「尾田栄一郎 県民栄誉賞 2018/4/15 協力：集英社「週刊少年ジャンプ」編集部」と刻まれる。台座としては必要最小限な情報しかなく、キャラクターの作者である「尾田栄一郎」の名は見えるが、これを製作した者（作り手）の名は見えない⁵。前出の御堂筋彫刻ストリートの場合は作品タイトルと制作者の名はしっかりと銅像とともに刻まれていた。他のサンジ、ウソップの各像の台座も「県民栄誉賞 2018/4/15」の文字を欠く以外は同じである。

益城町交流情報センターミナテラスの交流広場に設置されたサンジ像（資料編⑤）は、隣接する陸上競技場を背に、情報セン

ターの建物の方を向いて颯爽と立っている。左手で持つトレイの上の皿にはエビの爪らしきものやイカやタコと思しき足が盛られている（資料編⑤左手の持物）。

熊本地震で震度7を二度経験し、甚大な被害を受けた益城町、町内の7つの小中学校の給食を作っていた「給食センター」が被災し、その再建には2年の歳月がかかった。そんな益城町にコックであるサンジは駆けつけ、地元農産物を使い、美味しく温かい給食を作るのである。左手のトレイの上のお皿の海の幸はサンジの「海のコック」を表す持物なのであろう。

次に阿蘇駅の広場前に設置されたウソップ像は、左手を天高く突き出し、左手の人差し指はピーンとまっすぐ天の方を指している（資料編⑥）。「狙撃手」としてのウソップは、それを特徴付けるパチンコを背中に背負っている。ウソップは緑（自然）の力を操る道具で、草原の再生を手助けし、住民の誇りと笑顔を取り戻す任務を負っているようだ。ウソップ像は阿蘇駅の方を向いて雄大な自然の阿蘇山を背に設置されている。天を指し示した左手の人差し指には地域の人々や阿蘇を訪れる人々に力強さを与え、岩に置かれた左足にもその力がみなぎっているように表されているように思える。

現在、麦わら一味の船長のルフィ像を筆頭に、仲間のサンジ、ウソップの二人、被災地した地域に派遣され、それぞれの特技や武器を駆使して、復興の手助けをしているのである。造形的にみても、それぞれのストーリーを背負った姿がしっかりと形になって表れている。

また、実際現場に行って、感じたのは年末の冬休みに入ったとしても、それらの像を訪れる人々が多いことである。ワンピース資料編③の新聞記事でも、除幕式の際の記事であるが、子供連れの親子がその銅像と一緒に写真をおさめる光景がそこにはあった。ルフィ像も平日の夕方に撮影を実施したが、ルフィ像が目的でないとしても、県庁に用事があったスーツを着込んだサラリーマン風の大人たちも帰り際、スマートフォンのカメラで写真を撮る光景に何度も出くわした。

前述した御堂筋彫刻ストリートの彫刻の裸婦像とは異質な雰囲気を実際現場に赴いて感じた。ではこの銅像の裸婦像と麦わら一味の銅像にはどんな差があるのだろうか？その点について最後に自分の私見を述べて本小稿の結びとしたい。

おそらくその違いは、御堂筋の裸婦像の作品のテーマは「人間賛歌」を掲げ、それで作品を収集しており、裸婦像そのものが場所にひもづく必要がないのである。それに対して、麦わら一味の銅像は、台座こそキャラクターの名前を及び作成者尾田栄一郎氏の名前と「週刊ジャンプ」など場所にひもづく要素は含まれていないが、尾田氏が届けたメッセージやそこから生まれた麦わら一味が熊本復興のために「動く」というストーリーがこれらの像には付帯しているので、もちろん「ワンピース」の人気ということもあると言えるが、それぞれの像が熊本の被災した地に降り立ち、キャラクターの特徴・特技を活かして、ストーリーができており、この被災地を含めたストーリー展開と銅像の組み合わせが、御堂筋彫

刻ストリートや熊本の長六橋の裸婦たちとは異なる風景を作っているのではないかと考える。

さらに両者の違う点として、御堂筋の彫刻は制作者の名称が出ており、麦わら一味のそれはキャラクターの作者が台座に刻まれることである。この点も今後の彫刻を考える上での重要なポイントになっていくだろう。

今後も、麦わら一味の銅像については引き続き、実地調査をして、また「銅像」という観点から、どこかの機会で紹介できればと考えている。

今後もこの銅像を歩く旅は続いていく。

¹ 永田（2019）「小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く」『崇城大学芸術学部研究紀要第12号』（2018）、pp.15-25.

² 【御堂筋彫刻ストリート作品集 W01-14】【御堂筋彫刻ストリート作品集 E01-15】のキャプションについて番号「W01-14」は御堂筋の歩道西側の作品14点、番号「E01-15」は御堂筋の歩道東側の作品15点を指す。キャプションは番号、作品名、制作者、寄付者、除幕年（和暦）で示している。

³ ケネス・クラーク著、高階秀爾・佐々木英也訳（2004）『ザ・ヌード』（ちくま学芸文庫）筑摩書房、p.18、ジョン・バージャー著・伊藤俊治訳（1986）『イメージ視覚とメディア』パルコ出版、pp.66-67.

⁴ R・クラウス（2007）「彫刻とポストモダン展開された場における彫刻」『反美学 ポストモダンの諸相（新装版）』（ハル・フォス

ター編・室井尚・吉岡洋訳)、勁草書房、pp.69-71.

- ⁵ ルフィ像、サンジ像、ウソップ像の製作は富山県高岡市にある銅像製作会社、竹中銅器株式会社が担当している。(http://www.takenakadouki.com/cms/w_all/cate_area/kyu-oki/kumamoto/post_4390.html)

【参考文献】

- 小田原のどか (2017) 「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』(白川昌生・金井直・小田原のどか) トポフィル, pp. 36-69.
- 小田原のどか編著 (2018) 『彫刻 1 : 空白の時代、戦時の彫刻／この国の彫刻のはじまりへ』、トポフィル
- 木下直之監修 (2011) 『東京の銅像を歩く (ポケットヴィジュアル)』 祥伝社
- 木下直之 (2014) 『銅像時代 もうひとつの日本彫刻史』、岩波書店
- ケネス・クラーク著、高階秀爾・佐々木英也訳 (2004) 『ザ・ヌード』(ちくま学芸文庫)、筑摩書房
- J・バージャー著・伊藤俊治訳 (1986) 『イメージ 視覚とメディア』、パルコ出版
- 墨威宏 (2016) 『銅像歴史散歩 (カラー新書)』(ちくま新書)、筑摩書房
- 永田郁 (2019) 「小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く」『崇城大学芸術学部研究紀要第 12 号 (2018)』, pp. 15-25.
- 吉澤弥生 (2010) 「妄想のパブリックアート @御堂筋」『VOL 04』(責任編集田崎英明、白石嘉治、木下ちがや、平田周)、以文社
- (2011) 『芸術は社会を変えるか? 文化生産の社会学からの接近』、青弓社

R・クラウド (2007) 「彫刻とポストモダン 展開された場における彫刻」『反美学 ポストモダンの諸相 (新装版)』(ハル・フォスター編・室井尚・吉岡洋訳)、勁草書房、pp.65-80.

WEBサイト参照

御堂筋彫刻の紹介のHP

<https://www.midosuji.biz/intro/sculp.html> (2020.1.8)

ワンピース熊本復興プロジェクトHP

<https://op-kumamoto.com> (2020.1.8)

永田 郁：銅像を歩く。小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く（つづき）



図1 平和の群像 1951年
菊池一雄制作 三宅坂小公園
(木下直之監修『東京の銅像を歩く（ポケット
ヴィジュアル）』祥伝社、2011年、p.93より転
載）



図2 五代友厚君像・土居通夫君像・稲
畑勝太郎君寿像
大阪商工会議所（筆者撮影）

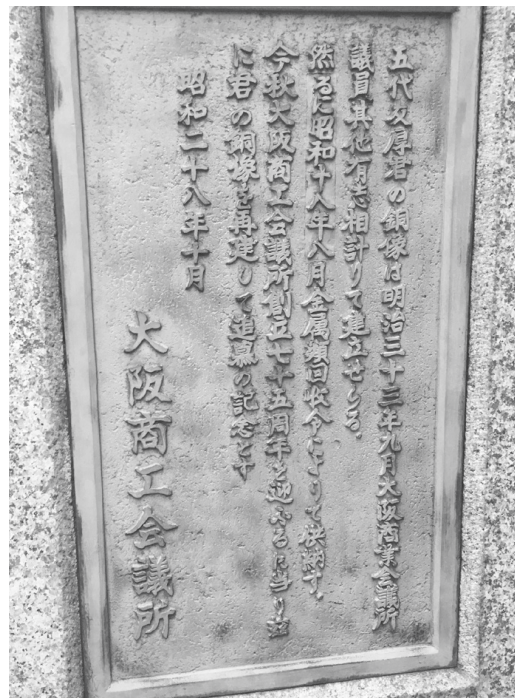


図2 五代友厚君像の台座及び碑文 大阪商工会議所（筆者撮影）



図3 島津斉彬公之像 1917年
朝倉文夫制作 鹿児島市照国町
(筆者撮影)



図4 長六橋（熊本市）を行き交う車（上）及び彫像の前を通り過
ぎる人（下）
2019年12月28日（土）（筆者撮影）

永田 郁：銅像を歩く。小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く（つづき）



図4 遥 古賀勝 作
長六橋（筆者撮影）

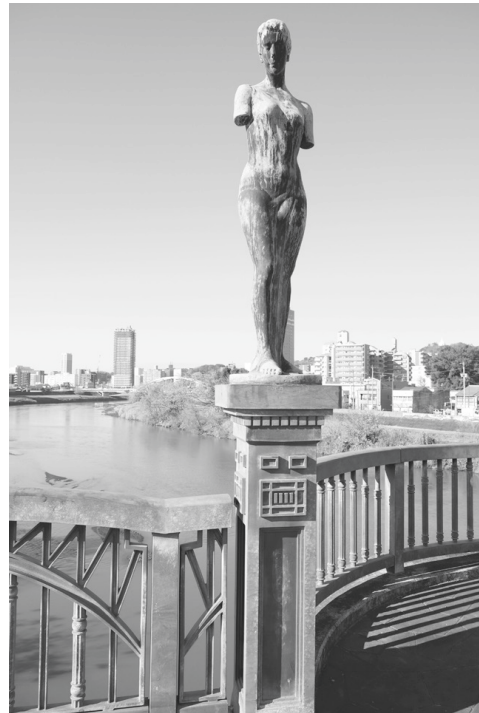


図4 みなも 川上順一 作
長六橋（筆者撮影）

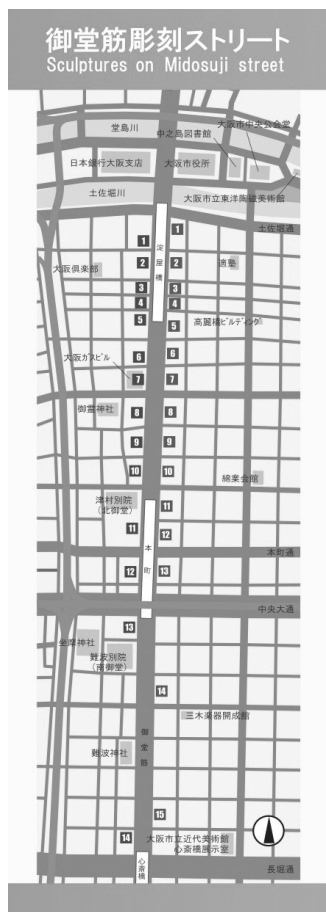


図4 香魂 本山十三 作
長六橋（筆者撮影）



図4 芽生え 石原昌一 作
長六橋（筆者撮影）

【御堂筋彫刻ストリート作品集
W01-14】



御堂筋彫刻ストリートマップ
西側銅像数字 (W01-14)
東側銅像数字 (E01-15)



W01 ダンサー
V. クロチェッティ
(株)東京銀行 (三菱東京
UFJ銀行)
H.6.10



W02 ボジョレーの娘
富永直樹
(株)三井住友海上火災保険
H.20.5



W03 水浴者
マルチェロ・マスケ
リーニ
富士銀行 (現 (株)みずほ
銀行)
H.6.10



W04 ヘクトルとアンドロマケ
ジョルジオ・デ・キリコ
(株)日本興業銀行 (現 (株)みずほ銀行)
H.6.10



W05 啓示
日高正法
ハタダ株式会社
H.6.3



W06 大空に
桑原巨守
(株)武田薬品工業
H.8.3



W07 イヴ
オーギュスト・ロダン
大阪瓦斯株式会社
H.4.8

永田 郁：銅像を歩く。小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く（つづき）



W08 踊り子
フェルナンド・ボテロ
株長谷工コーポレーション
H.5.1



W09 女のトルソ
オシップ・ザツキン
湯浅富一・湯浅禮子
H.21.5



W10 レイ
佐藤忠良
株三井不動産
H5.1



W11 アコーディオン弾き
オシップ・ザツキン
株竹中工務店
H.5.10



W12 髪をとく娘
バルタサール・ロボ
株淀川製鋼所
H.9.3



W13 二つに分断された人体
ヘンリー・ムーア
株伊藤忠商事
H.6.10



W14 布
佐藤忠良
株大和銀行（現 株りそな銀行）
H5.3

【御堂筋彫刻ストリート作品集 E01-15】



E01 みどりのリズム
清水多嘉示
(株第一勧業銀行 (現 (株みずほ銀行)
H.6.10



E02 休息する女流彫刻家
アントワーン・ブールデル
日本生命保険相互会社
H.6.10



E03 座る婦人像
エミリオ・グレコ
(株大林組
H.6.10



E04 姉妹
中村晋也
(株東京海上火災保険 (現 (株東京海上日動火災保険) H.6.10



E05 みちのく
高村光太郎
(株三和銀行 (現 (株三菱東京UFJ銀行)
H.6.10



E06 陽光 (ひかり) の中で
佐藤敬助
(株アクセス
H.15.9



E07 ジル
朝倉響子
(株さくら銀行 (現 (株三井住友銀行)
H.5.10



E08 火の玉No.1
フィリップ・キング
(株大阪ウォーターフロント開発
H.5.10

永田 郁：銅像を歩く。小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く（つづき）



E09 若い女
桜井祐一
(株)日本長期信用銀行（現 (株)新生銀行）
H.8.3



E10 腕を上げる大きな女
アントワヌ・ブールデル
(株)住友銀行（現 (株)三井住友銀行）
H.5.10



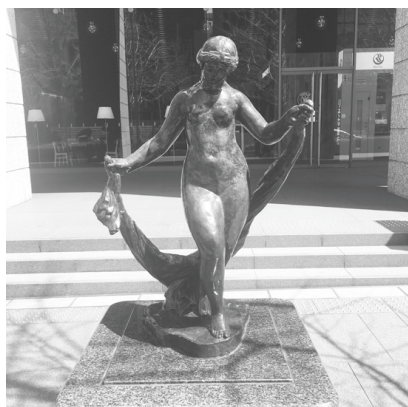
E11 渚
淀井敏夫
(株)田村駒
H.5.10



E12 道東の四季—春—
舟越保武
(株)清水建設
H.5.10



E13 ブレンダのヴィーナス
フランチェスコ・メッシーナ
(株)三保造船所
H.6.10



E14 ヴェールを持つヴィーナス
オーギュスト・ルノワール
鴻池グループ
H.5.3




E15 少年と少女
リン・チャドウィック
大阪市
H.8.3

【資料編：ONE PIECE 熊本復興プロジェクト～麦わらの一味「ヒノ国」復興編】

くまもん

熊本で大地震が起きました。(九州全域)
僕は熊本生まれ ぶるさとなんです。
直接甚大な被害を受けた方々に、深く、心より
お見舞い申し上げます。家族や友達と直接連絡が
とれるわけですが、ホントみんな恐くて、とても
頑張ってます。連絡したこっちも安心させる
様な事みんな言ってくれて、たくましい!!
ただ人間が気も
張れる時間、限界が
あります。その糸が切れる
前に何とか心が落ちける
状態になってほしいです。
大人は子供達を不安に
させない様に、必死です。子供達に、1番に笑って
ほしい! そしたら大人は頑張れるんだ!!
今、まだ民間から手を出すのは難しいですが、
必ずや復興のお手伝いさせていただきます。
2016. 4. 17
どうかフンバってください!! 尾田栄一郎



- ①熊本地震直後、4月17日に熊本出身の漫画家尾田栄一郎氏が送ったメッセージ
(<https://op-kumamoto.com> より転載)

暮らしに身近な「くまもとの今」をお知らせします / 2019 令和元年 12月号 No.132 【熊本県広報誌】

県からのたより

未来をひらく力強い産業をつくる



今月の注目情報
ONE PIECE熊本復興プロジェクト
～麦わらの一味「ヒノ国」復興編～
平成28年熊本地震の発生直後から続く「ONE PIECE熊本復興プロジェクト」は今年度4年目を迎えました。昨年11月に福岡第一地区の復興計画策定を記念し、後援アワードにルフィ像を設置。今年度からは、麦わらの一味「ヒノ国」復興編として、県内は全県的に麦わらの一味の活動の場となる予定で展開しています。

麦わらの一味と一緒に復興への歩みを進めるとともに、力強い地域産業の創造に取り組みます。

県からのたよりです!

〒862-8570 熊本県中央区水前寺6丁目1番1号 熊本県広報グループ「県からのたより」所
TEL.096-333-2027 FAX.096-386-2040 MAIL.kouhou@pref.kumamoto.jp (熊本県) 編集 印刷

熊本県人口1,231,000人(2017年11月1日現在) 746,489人 熊本市人口227,546人 222,546人 熊本市人口に占める割合 編集 印刷

- ②ワンピース熊本復興プロジェクト～麦わら一味「ヒノ国」復興編に関する熊本県の広報誌の記事
〔県からのたより〕2019年12月No.132【熊本県広報誌】より転載)

ウソップ 草原を元気に



阿蘇駅前 ワンピース銅像3体目

人気漫画「ONE PIECE(ワンピース)」に登場する狙撃手「ウソップ」の等身大銅像の除幕式が8日、阿蘇市黒川のJ R阿蘇駅前であり、詰めかけたファン約1200人が完成を祝った。

ウソップは作者の尾田栄一郎氏熊本出身。県内各市町村に計9体の設置が計画されている。県庁の主人公「ルフィ」、益城町の料理人「サングリー」に続き3体目。

ウソップ像は、長約2.5メートル、全長約2.5メートルの力強い、バチン状の道具を使って敵を倒す。熊本地震後、阿蘇の草原再生を手助けしようという願いを込め設置された。制作費は約10万円。

式では、佐藤興興市役所がバチンで弾を飛ばすのを、5人の巨大バルーンが割れ背後から像が登場。集まったキャラクターの衣装を着たファンらが歓声を上げた。

県庁の主人公「ルフィ」、益城町の料理人「サングリー」に続き3体目。

ウソップ像は、長約2.5メートル、全長約2.5メートルの力強い、バチン状の道具を使って敵を倒す。熊本地震後、阿蘇の草原再生を手助けしようという願いを込め設置された。制作費は約10万円。

式では、佐藤興興市役所がバチンで弾を飛ばすのを、5人の巨大バルーンが割れ背後から像が登場。集まったキャラクターの衣装を着たファンらが歓声を上げた。

県庁の主人公「ルフィ」、益城町の料理人「サングリー」に続き3体目。

- ③ワンピース銅像3体目ウソップ像(阿蘇駅前)の除幕式を伝える記事
(熊本日日新聞朝刊2019年12月10日(火)より転載)

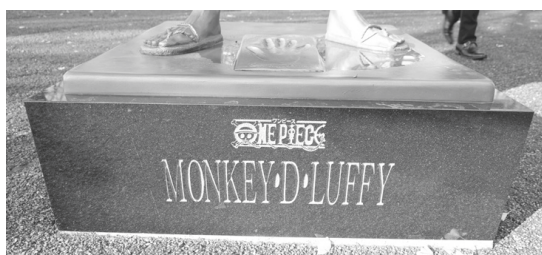
永田 郁：銅像を歩く。小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く（つづき）



④ルフィ像 正面
熊本県庁プロムナード（筆者撮影）



④ルフィ像 背面
熊本県庁プロムナード（筆者撮影）



④ルフィ像 台座正面
熊本県庁プロムナード（筆者撮影）



④ルフィ像 台座背面
熊本県庁プロムナード（筆者撮影）



⑤サンジ像 正面
益城町交流情報センターミナテラス
(筆者撮影)



⑤サンジ像 背面
益城町交流情報センターミナテラス
(筆者撮影)



⑤サンジ像 台座（正面・背面）
益城町交流情報センターミナテラス
(筆者撮影)



⑤サンジ像 左手持物
益城町交流情報センターミナテラス
(筆者撮影)

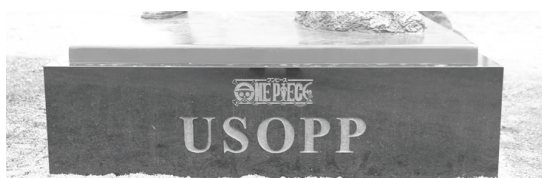
永田 郁：銅像を歩く。小田原のどか「この国の彫刻のために」『彫刻の問題』を歩く（つづき）



⑥ウソップ像 正面
阿蘇駅（筆者撮影）



⑥ウソップ像 背面
阿蘇駅（筆者撮影）



⑥ウソップ像 台座（正面・背面）
阿蘇駅（筆者撮影）



⑥ウソップ像と阿蘇駅
（筆者撮影）

